

2012年7月12日洪水についての見解

(第2報)

2012年7月15日

立野ダムによらない自然と生活を守る会 代表 中島康

熊本市島崎4丁目5-13 電話090-2505-3880 <http://stopdam.aso3.org/>

1. 7月12日洪水は昭和28年6・26洪水以上の出水

熊本県内は7月12日午前、記録的な豪雨に見舞われ、白川は22年ぶりに越水した。白川（代継橋地点）の最高水位も6.32m（午前10時30分）に達した。

7月14日、白川・黒川合流点のすぐ上流にある明治33年（1900年）につくられた黒川橋が流失していることを確認した。黒川橋のあった峡谷は形状が変化していないと考えられるので、少なくとも黒川流域では6・26洪水を超え、この112年間で最大の出水であったことが証明される。白川の集水域の形状を考えると、熊本市内でも毎秒3400トン以上の洪水流量であったと推定される。中流域住民との会話の中でも「6・26以上の出水だった」「6・26に匹敵する出水だったが、当時より川幅が広がっているので被害は少なかった」などの声が聞かれた。



流失した黒川橋 2012年7月14日長陽大橋より撮影



1900年に完成した黒川橋 2011年12月18日撮影

洪水名	水位(代継橋地点)	流量
昭和28年6月26日洪水		毎秒約3400トン
昭和55年8月30日洪水	5.88m	毎秒約2300トン
平成2年7月2日洪水	5.79m	毎秒約2300トン
平成19年7月7日洪水	4.93m	毎秒 1364トン
平成24年7月12日洪水	6.32m	毎秒 3400トン以上(現時点での推計)
計画高水位	6.68m	毎秒 3000トン

2. 立野ダム建設予定地周辺の状況

立野ダム本体予定地右岸側の工事用道路が流失。工事用仮橋も流失している。最高水位は10m近かったものと推定される。（立野地点の水位は7月12日8時より18時まで測定不能）

調査時刻（7月14日17時）の立野地点の水位は3.99mであったが、大きな岩が流される音が絶え間なく続いていた。この増水した状況、大量の土砂や大きな岩が流されていく状況をみると、一辺が5m、長さ約80mの立野ダムの3つの「穴」は埋まってしまうことが容易に考えられる。

※以下写真は全て2012年7月14日午後に撮影



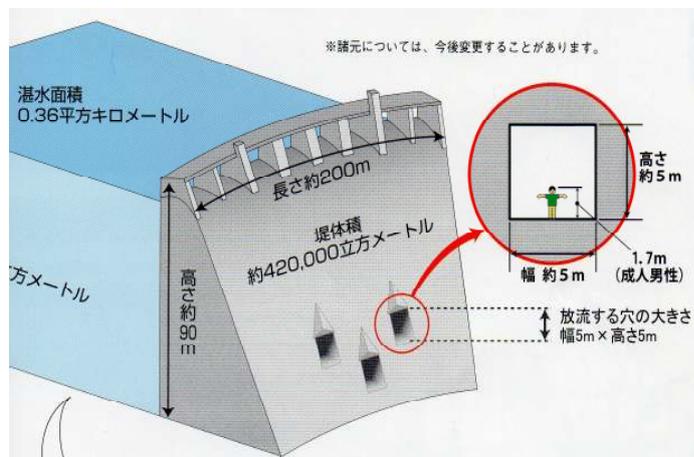
立野ダム本体予定地右岸側の工事用道路が流失



工事用仮橋も流失



5m以上と思われる大きな岩も河道に



立野ダムの「穴」は5m x 5m (国交省資料より)

3. 中流域は「河川整備計画」が未策定

(1) 大津町

【現況】河道の断面積が小さいため、多くの箇所ですぐ越水。多くの箇所ですぐ古いコンクリート製の護岸がこわれ、田植えしたばかりの水田も土砂で埋まっている。岩戸温泉は露天風呂まで浸水。昭和28年6・26洪水でも生き残った代官橋も左岸側護岸が流失し、通行不能に。

【対策】まずは被災農地への補償を十分に行う。「河川整備計画」を策定し、河川改修を進める。その際、①堆積した土砂を撤去する②川幅を広げる、の2点を基本に、親水性の高い護岸にする。水田の畦をかさ上げし、保水機能を高める。中流域の水田の保全是、下流域の地下水の保全にもつながる。



古いコンクリート製の護岸がこわれている



岩戸温泉の前の護岸もこわれている



土砂に埋まった水田



左岸側護岸が流失した代官橋

(2) 菊陽町

【現況】河道の断面積が大津町より大きいと、多くの箇所でも越水していたが、護岸が損害を受けた箇所は大津町よりも少ない。

【対策】まずは被災農地への補償を十分に行う。「河川整備計画」を策定し、河川改修を進める。その際、①堆積した土砂を撤去する②川幅を広げる、の2点を基本に、親水性の高い護岸にする。水田の畦をかさ上げし、保水機能を高める。中流域の水田の保全は、下流域の地下水の保全にもつながる。



菊陽町の白川の状況

4. まとめ

「想定外の災害のためにも立野ダムが必要だ」という意見がある。しかし、立野ダムの洪水を貯める容量は、想定した洪水を調節する分しかない。今回の洪水のような想定以上の洪水ではダム湖は満水になり、洪水調節不能となる。ダム湖に流入した水をそのままダム上部の8つの穴から非常放流することになり、「洪水調節ダム」として機能しなくなる。

今回、浸水被害を受けた中・下流域は、河川改修が未改修の地区ばかりである。さらに驚くことに、河川改修工事のもととなる「河川整備計画」が、大津町や菊陽町の白川では策定されていない。ダム計画があると、下流の河川改修がおろそかになることは明らかである。

黒川橋の流失により、今回の洪水は「過去最大」と言われてきた昭和28年の6・26洪水を上回る可能性があることが明らかになった。それでも6・26洪水と比べ被害が大幅に少なかったのは、これまでの河川改修の結果である。

今回、熊本県内で20名の方々が亡くなられたが、いずれも土砂災害が原因である。今後は河川改修をさらに進めるとともに、土砂災害の要因となっている放置人工林の整備（間伐）を行うなど、山と川を一体で考えた、白川流域全体を見通した災害対策を進めていくべきである。